

江藤一幸さんの名刺には「百姓・百勝・百笑」と「肩書き」が付いている。江藤さんは39歳、九州の屋根ともいべき大分県の九重連山に囲まれた山間の村で7haの野菜作をする開拓二世だ。

九州とはいって、江藤さんの住む九重町は標高350mから1000mを超す山麓の傾斜地に広がる地域であり、江藤さんの畠も六五〇mの標高がある。年間の平均気温は一三・一四度で、夏の気温が低く温度の日格差が大きい。冬は雪こそ積もらないが夜間にマイナス一〇度を

下ることも少なくないという準高地だ。

江藤さんの父親・幸さん(63歳)が二歳だった昭和二九年に地元の村から入植したものだ。

健康新規好さ

江藤さんを知ったのは、スガノ農機が募集する経営体験記への応募原稿を通じてだつた。

ハクサイ(四ha)、キャベツ(一・五ha)を中心に行き来り、花木などを栽培する七haの畠は年一作しか使わない。毎年

一〇〇tを超える大量の堆肥を投入し、ソルガム、ライ麦など夏冬取り混ぜての緑肥を入れる。高校時代から自分でブルに乗つて整備してきた畠には、プラウ耕、サブソイラ耕を欠かさない。そして酪農家の交換耕作。傾斜もきつく、夏に集中して雨が降る地域であつてもエロージョンを起こしていない土壤管理。

「有機物循環農法体験記」というテーマでスガノ農機が毎年募集している経営体験記の内容としてはその理念にピッタリのものだつた。でも、筆者が江藤さんの印象を深く感じたのは、体験記の中のこんな一節だつた。

「農業というのは神様の次の仕事。どんなに工業が栄えても、人はTVや車などの工業製品を食べて生きれるわけではない。農家の手にかかった物を食べない限り、神様からいたいた命をまつとうできないのだから。楽しく、プライドを持って百姓してます」

なにか突き抜けたような明るさと自信を感じた。

そして初めて江藤さんに会つたのは、「体験記」の表彰式だつた。挨拶に立つた彼は、開口一番、

「村とか農業の世界というのは、皆が一緒ではないと角もたつし、そういうことを避ける風潮があります。でも、やることも考えることも様々に違う人がいる方が健康で未来があるのだと思う。私は村では少数派だけど、そのことにプライドを持っています。かといって多数派を否定するつもりも必要もない。むしろ、多数派でいるより少数派だからこそ学べることも多い。孤立されなければ……」

子は親の背中を見て育つ

熊本空港からスガノ農機熊本営業所の所長福原氏のトラックで約二時間、前日



江藤一幸
(39歳)
大分県玖珠郡九重町大字菅原
電話番号 09737(8)9632



記念写真を撮った7haの畠は、江藤さんがブルで造成したものだ

百姓・百勝・百笑

農業経営者ルポ……第9回

「プロフィール」九重連山の開拓部落に開拓二世として生まれ、7haの野菜を作る経営者。青年団の活動をきっかけに様々な活動の中で、国内外もとより海外の人々との交流を深める。その体験から、異質の人々がお互いを認め合つて生きる社会の健康さ、自らの背景にある自然の持つ可能性を大事にすることを現在のテーマにしている。

同じではないか。否定し合うよりもそれを認め合うことが生産的でしょう……」
そして挨拶の最後に、「僕はこれから経営を小さくしていくと考へてゐる。現在の経営条件、そして僕の住む場所の風土、土、自然をもつと活かし切る経営で程々に暮らすことを目指したい」と。

それを聞いていたある人が、

「あの人はこれからもつと成長する人だよ。あの前向きで人間的若々しさ、それにあの人には、鋳型にはめられていない健康的な不格好さというものがいる。ほら、子犬だって、柴犬のような犬は小さいときから形が整つていて、大きくなると足だけがやたら大きくなったりして不格好なものだろ。ヒトも同じだよ」と耳打ちした。

江藤さんを評するなんとうまいとえだろう。彼は、どんな家族、どんな両親の間で育ち、何を経験してきたのだろうか。



親の背中を見て育った江藤さん。自分の背中で何を語るのか…

に降った雪が所々白く染めた阿蘇の外輪山を抜け、さらに山里に入つたところに江藤さんの家はあつた。

江藤さんの家族は、父の幸さん（63歳）、母・いつみさん（62歳）、そして一幸さんと妻の由美さん（6歳）の間には江里奈う

と母の日暮さん（39歳）の間に、江里奈ちゃん（4歳）と広大ちゃん（2歳）の二人。また、江藤さんには福岡で寿司職人をしている弟がいるそうだ。

子供の頃に父を亡くし、小さなころから母親を助けて弟たちを育ててきたといふ幸さんは、働くこと、未来を考えて今

も辛抱するという習慣ができていたのかかもしれない。昭和二九年、幸さんが単身開拓に入った当初、畑は酸性の強い火山灰土で肥料もなく、陸稲がわずかに取れるだけだった。嫁いできたいつみさんとともに、鍬と鎌で原野を少しづつ開拓し畑を改良していった。当時、政府から開拓民へ肥料の配給もあつたが、多くの農

ケースなど、たくさんの人たちが開拓者を去つていった。幸さんは離農者の土地を買い集めていった。

トラックもそりだつたが、必要な機械を買うのも一番早かつた。でも、最初のトラック以外、機械は現金で買う、それ

が無理ならできる限り頭金を多くして長くともその年内に返せるようにした。

辛くとも借金はない。
そして、妻のいつみさんと共に黙々と
働いてきた。

それぞれが違うから

母親のいつみさんによれば、江藤さんは子供時代からよく手伝いをする子供だったという。中学を卒業すると農業をやるといいだした。

家がそれを現金にあるいは食べ物に変え

「高校までは行け」

という父の命令で高校に入った。でも四時半には家に帰ってきて仕事を手伝っていた。当時の江藤さんにとっては、開

拓當時のままの段々畑をブルで草するのが面倒がつたのだそうだ。

親から農業を継げなどとは言われなかつた。

江藤さんは仕事を継ぐことを特別のこ

とだとは思わなかつたし、また農業が面白かつた。文字通り親の背中を見て育つたのだろう。ゼロから開拓地を切り開いてきた父、どんな時も明るい母は、その仕事、その人間としての誇りをもつた人

生を歩むだけで、江藤さんに何を言う必要もなかつたのではないか。

の仕事をサボるわけではないが、青年団の活動をきっかけにして、様々な社会的な活動に積極的に参加するようになつた妻の由美さんとの出会いもボランティア活動を通じてだつた。

でも東京、大阪だけでなく海外へも出ていく江藤さんを両親は黙つて見送った。外に出ていくだけではない。海外からも含めてたくさんの人々が江藤さんを訪ねてくる。

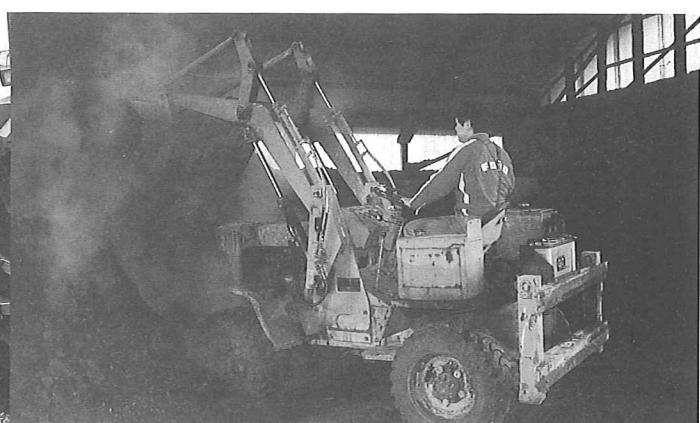
異なる歴史や生活、職業をもつ人々との出会い、共同して何事かをなしていく

体験の中から「異質だからこそ価値があり、そして大事に思」（二三、二三）、

「それを大事に思う」という江藤さんの信条が生まれてきているのだろう。その体験は、単に人付き合いがうまくなるということではなく、外から自分を見つめる江藤さん自身のトレーニングでもあつたのではないだろうか。



プラウに付いている油圧オフセット装置は江藤さんの自作だ



乾燥鶴糞、酪農ふん尿等から毎年100t以上の堆肥を作る

農業ということでは同じでも、韓国、タイ、中米と、それぞれの風土に根ざした生き方をしている人たちがいて、暮らしがあった。そして、日本の農業が便利な技術手段を使っているからといって彼らより優れているなんてとても思えなくなつた。むしろ、その旅は、手取り早い手段がある分だけ自然の力を活かしきれていらない自分たちの農業の姿に気付かされる体験でもあつた。

創業者だから後継者たりえる

「中山間の条件の悪い地域だから、付加価値の高い施設園芸を、といった指導が補助金付きであつたりする。それも良いかもしれません。でも、自然やここにしかない風土の可能性をまだ活かせてないと思うんです。土にこだわった作り方をやればやるほど自然の持つ可能性というものが見えてくる。そんな作り方

をした野菜をありがたいと言つて買ってくださるお客様がいて、それで暮らしに成り立つなんてステキでしょ」

収穫出荷が大きな手間になる野菜作で両親の労働力はいつまでも頼れない。現在頼んでいる人手も高齢化してきている。経営を縮小しようという背景にはそんな事情もある。しかし江藤さんは後ろ向きなわけではない。

一つは売り先だ。江藤さんは、今まで

の市場出荷の他に生協と提携した野菜生産を取り組んでいる。確かに市場出荷は儲かるときは大きいし、仕事としても面白い。しかし、大きな利益はなくとも安定した収益を上げられるもう一つの販売チャネルを作ることを考えいかねばならない。

そして売り方。野菜を売るだけでなく、お客様とともに強い絆を持てないものか。お客様との関係そのものに意味を

持たせようと考えているのだ。作物だけでなく江藤さんの地域の風土ごと買つてもらえるようなお客さんとの付き合いはできないか。作物を作つて売るだけでなく、農業という仕事の社会に対する新しい可能性を考えているのだ。

二〇年以上も父親の幸さんと共に自ら畑を造成し、面積の拡大に力を入れてきた。経営を受け継いだ江藤さんは、今、父がやってきた経営路線を変えようとしているのだ。

農業あれ企業あれ、経営を受け継ぐ者がただ先代のやつてきたことを繰り返すだけなら、現代においては、その人は資産管理人にすらなれないだろう。優れた後継者とは、受け継ぐ資産のある後継者だから成功するのではなく、その人自身が優れた創業者であるからなのだ。

旧来からの脱皮、新しい前進がないかぎり守るべき歴史、あるいは現在すらも守らなければならない。

三九歳の江藤さんが経営責任者になつたのは父上の若さもあるが、昨年からだ。普通の後継者たちより少し遅いバトンタッチかもしれない。

これは、筆者の勝手な想像である。江藤さんの父、幸さんは経営を任せたタイミングを考えていたのだ。後継者がジックリ踏み止まり、受け継ぐべき江藤農場の歴史とは何か、何が今をあらしめていくかを考えさせたかった。親の姿を見ればそれは伝わる自信があった。小さいときから父親代わりとなつて弟たちを育てた幸さんは、育てることは黙して働く姿を見せる以外にないことを知っていた。

また、子供が自ら育つものであることも知っていた。幸さんが他所の飯を食べることで世間を学んだように、後継者に世の中と己れ自身をみつめる目を養わせたかった。その時代に合わせて。いつまでも青年の、あの「健康的な不格好さ」を持ち続けることのできる後継者を育てようとしたのだ。自分を超えるために。そして、これから江藤さんと由美さん夫婦は子供たちに何を、彼らの背中で伝えていくのだろう。

百姓・百勝・百笑。そして、百姓万歳、家族万歳。



最近江藤さんが面白がってる
米軍放出品の入札申し込み書。
申し込めば古物商の免許がな
くても誰でも入札できて、掘
出し物が多いそうだ。「聞いて
えくれればやり方を教えて
よ」と江藤さん



江藤さんはクラシック（ポンコツ？）機械を集めて修理するのが趣味。もちろん仕事に使う。どれも高くて数万円、酒1升、七面鳥2羽程度。ただし、修理の部品代が本体より高いなんてこともある。上から酒1升のブル、ポンコツ屋で買ったウニモグ。自分で3Pも付けたが実用的ではなかった。修理中のドイツトラクタ。他にスキッドステアローダー、バックホーなども。新品のフォード85馬力もある